

吃音がある子どもが幸せに生きるために ことばの教室でできること

千葉市立山王小学校 安田恵美

私は、子どもたちに自分のことを自分で決められるようになってほしいと思って、日々の授業をしています。自分のことが分かって、できることややりたい自分が見えてきてやってみようとして自分で決めて挑戦することにつながると思います。そこから、吃音に対する気持ちがはっきりして、将来にいかせると思います。それが、自分らしく幸せに生きることにつながるのではないかと考えました。

健康生成論

1970年代に、アーロン・アントノフスキーによって提唱されました。第二次世界大戦でアウシュビッツ強制収容所に入れられた人たちの、その後の健康状態を研究した結果、7割に問題がみられたが、3割の人は健康に生きていました。7割の人よりも、健康に生きていた3割の人に注目し、健康になる要因を考えていく理論が健康生成論で、その人たちに共通していたものとして、SOC（首尾一貫感覚）を発見しました。

SOC（首尾一貫感覚）

- 把握可能感 自分の状況がわかる感
- 処理可能感 ストレスに対処できる感
- 有意味感 人生に意味があると感じる、やりがい感

この3つの要素をことばの教室の学習に当てはめると、次のようになります。

- 把握可能感 様々な教材に取り組み、吃音自分の吃音のことがわかる
- 処理可能感 自分は何をしたいのか考え、挑戦することができる
- 有意味感 どもりながらも挑戦したことは将来に意味があると感じる

吃音冰山説 吃音の問題を理解するための大事な教材の一つ

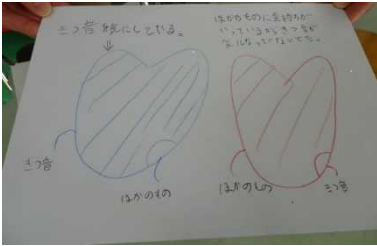
自分にも周りにも見えている「どもる状態」が問題ではなく、水面下に沈んでいる、吃音を隠したり、話すことから逃げる行動や、吃音は劣ったものだととらえる考え方、どもる不安や、どもった後の恥ずかしさなどの感情が問題だとしました。水面上の「どもる状態」は自分では変えられないが、水面下の自分がとっている考え方や行動は変えることができます。そこへアプローチする学習に取り組み、吃音冰山説の図を自分で描いたり、水面下の問題に自分で気づくため吃音チェックリストに取り組みました。

- 対人関係、人間関係のチェックリスト
- 吃音に対する気持ちのチェックリスト
- 行動のチェックリスト

オープンダイアログ 子どもと対話をする時の姿勢

- 対等性…対話の中ではお互いに対等で一緒に考えていくという姿勢
- 応答性…子どものつぶやきも受け止めて、それを丁寧に返していく
- 不確実性への耐性…時間内で結論が出る対話ばかりではないので、勝手にゴールを決めず、子どもの変化を見守りながら一緒に考えていくという姿勢

「どもりと接する心の作り方」を卒業のまとめとした、Eくんの場合



1年生から6年間通級しました。低学年の頃は吃音に悩み、どもったらどうしようと不安もあり、泣きながら音読の宿題をしている子どもでした。卒業のまとめを作りました。

低学年の頃はどもったときに落ち込んだり、マイナスなことを考え、今考えると、心が吃音でいっぱいな状態だった。でも3年生の時、じゃんけんで負けて、全校集会で夏の思い出を発表することになり、緊張するけどできた経験が転機になった。高学年になるにつれ、吃音に対する感じ方が嫌なものからまあいいやに変わった。いろんなことを経験してできることが増えて、好きなこと、興味があるもので心がいっぱいになると吃音が小さくなることが分かった。これからも吃音で困ることが出てくると思うけれど、今からくよくよ考えても仕方ない、困ったらその時に考えればいいと思う。吃音でいっぱいの青い心になっていると気づいたら、好きなことや、新しいことで心をいっぱいになればまた赤になると思っている。その割合が大事なんだ。

「こんなすごいことを大人でもなかなか考えつかない。6年生でここに気づけるなんてすごい」と成人のどもる人から言われてとてもうれしそうでした。6年間、いろんな教材で吃音を知る学習に取り組み、ただ悩みを話すだけでなく、いろんなことにチャレンジしたことがこういうまとめにつながったのだと思います。そして、自分のことだけでなく、グループ学習をしている仲間、後輩たちに、僕がうまくいった吃音との付き合い方を伝えたいといって発表することは、意味があることだと感じ取ったと思います。

まとめ

考えや行動などを自分で決める子どもに育ててほしいと考え、わかる・できる・意味があるの3つを大事に対話を重ねてきました。自分のことを知り、やりたいことに挑戦し、自分のことを語る姿に成長を感じています。これまでの卒業生の近況を聞くと、運動会の応援団長をやり遂げた子、受験の面接で吃音のことを話して乗り越えた子、接客のアルバイトも休まずにできている子など、大人になっても吃音とうまくつき合いながら元気に過ごしていることが分かります。現在通級している子どもたちも卒業生のように自分らしく、幸せに向かって生きていってほしいと願っています。

吃音がある子の幸せを考えてきたので、子どもたちに、どんなことが幸せか、聞いてみました。子どもたちの誰も、吃音が治ることとは言いませんでした。みんなが元気であること、とか、生きていだけで幸せ、とか、中には、また行きたいな、また食べたいなどが叶うのでなく、平和にそう願えること、なんてすごいことを言う子もいました。

どもるとかどもらないとかではなく、子どもたちはもっと広く幸せを考えているんだなとわかりました。これからも、幸せに生きることについて、子どもたちと対話を続けていきます。